慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	Fielding, GibbonそしてMaugham
Sub Title	Fielding, Gibbon, and Maugham
Author	海保, 眞夫(Kaiho, Masao)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1990
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.58, (1990. 11) ,p.159(230)- 173(216)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	慶應義塾大学部文学科開設百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00580001-0173

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

Fielding, Gibbon そして Maugham

海　保　眞　夫

このエセーの目的は，18世紀イギリス文学，特に Henry Fielding と Edward Gibbon の二人が，William Somerset Maugham にとってどのような意味を持っていたのか考察することにある。

I. Maugham と読書

創作家は必ずしも常に鑑賞家を兼ねているわけではない。読者には自作の購入を勧めながら，みずからはアフリカの象狩りや競馬により大きな興味を抱いている作家が珍しくないのである。たとえば，Thackeray が好学の士であったのにたいして，ライヴァルの Dickens は明らかに読書家ではなかった。少年時代の彼が *Roderick Random* や *Gil Blas* を愛読し，特に Smollett の影響を深く受けたことは，その小説が物語っている。だが，結局 Dickens の読書は，少年時代の好みを一歩も出なかったと評しても誇張にはならない。名を成してのち，人生のさまざまな快楽を享受しうるようになった彼にとって，読書はあまりにも消極的行為に思われたに違いない。

Dickens とは対照的に，Maugham は一見活字に淫するタイプに属していた。以下に紹介するのは，短編集 *Ah King* (1933) 所収の "The Book-Bag" の冒頭の一節である。

> 惰性から読書をする人びとも少なくないが，実は私もこうした嘆かわしい人間のひとりである・・・我々にとって，読書は無しではすまされない麻薬の一種なのだ。我々ならばだれもが体験していることだが，あまりにも長く読書から引き離されていると，焦燥不安に駆ら

れ，心は苛立ち，活字の一頁を見て，ようやくひと息入れるということになる。

だが，この告白は読書にたいする Maugham の態度のすべてを語ってはいないし，また大きな部分を占めてもいない。なるほど彼は *Books and You* (1940) において，読書が楽しみのためにあることを繰り返し主張し，「読書の習慣を身につけることは，人生のほとんどあらゆる不幸からの避難所を築くことだ」と語っている。しかしながら，少なくとも彼個人にとっては，読書はけっして単なる楽しみではなかった。それに人生からの逃避はすなわち自己欺瞞の一変型であって，彼が最も排斥したことのひとつである。

もちろん，*The Vagrant Mood* (1952) 所収の愉快なエセー "The Decline and Fall of the Detective Story" が示しているように，ときには Maugham も純粋に読書の楽しみにひたっている姿勢を見せないわけではない。だが，こうした場合はむしろ稀であって，彼の読書態度は一般に考えられているよりはるかに積極的であり，実際的だった。彼は自己の人生設計を常に意識した男で，そのための義務はけっして彼の念頭を去ることがなかった。そして読書もまたこの義務の遂行に協力するものでなければならなかったのである。言い換えれば，Maugham の読書は彼自身が常に読者に戒めたもの，すなわち目的のある読書であった。

しかしながら，知識の獲得を主要な目的として彼が読書をしたと考えるのは，やはり誤りである。彼の学殖を評して「即日，英文学教授がつとまる」と語った批評家もいるが，こうした評価は彼自身が最も心外としたに違いない。彼にも *Don Fernando* (1935) のごとく博学と気まぐれから生まれたような作品が存在するけれども，彼が共感を覚えたのは，むしろ「学問に時間をかけ過ぎるのは怠慢だ」と述べた Francis Bacon であったと推測される。Maugham が文学研究者に認めた役割は，せいぜい Don Quixote がとった食事の内容を確認する程度のことだった。*Don Quixote* には，主人公が毎週土曜日に「苦痛と悲しみ」を食べたと記されているが，これが卵とベーコンにほかならないことは，著名な Cervantes 学者によ

って明らかにされている。おそらく Schopenhauer と同様，Maugham も学者たちを「多読の結果，自分の頭で考えることをやめてしまった人びと」とみなしていたのではないだろうか。

Maugham の読書態度が実際的だというのは，ひとつには，彼が創作上の素材を求めて読書したことを意味している。処女作 *Liza of Lambeth* (1897) が，今では忘れられた Arthur Morrison という作家の著作に負うところの大きいことは，既に指摘がなされているが，特に初期の作品の場合，Maugham は同時代の文学の露骨な影響下にあったと評してよいだろう。この点はいまだ十分な考察がなされていないだけに，特記する必要があると思う。たとえば，出世作となった喜劇 *Lady Frederick* (1907) が A. W. Pinero の *The Cabinet Minister* (1892) から無遠慮な借用を行なっていることは，Maugham の戯曲研究者たちはどの程度まで承知しているのだろうか。これら両作品のヒロインは，ともに借金を理由にユダヤ人の高利貸しから脅迫され，Pinero においては国家機密の漏洩を，Maugham においては結婚を強要される。両作品の関係はもとより一目瞭然であるが，Maugham の換骨奪胎は巧妙をきわめており，かろうじて剽窃という批判を免れている。

だが，Maugham の読書態度を実際的と評するとき，さらに大きな意味が存在した。結局彼にとって，読書は人生を知るための一手段であったといえよう。人生の意味を知ることは，Maugham に限らずあらゆる人間にとって切実な問題であるはずだが，これを本来の目的とするはずの哲学は，いつの頃からか無意味な戯言と目されるにいたっている。その責任をだれが負うべきにせよ，Maugham 自身は哲学の実際的意義をけっして見失うことがなかった。*The Razor's Edge* (1944) で，主人公の心情を理解しかねているヒロインにたいして，語り手（この場合は作者自身）はこう答える。「最も実りある生き方を学ぶこと以上に，実際的な事柄がこの世にあるだろうか。」

Maugham は realist であることを自認し，idealist を嫌悪した。それにもかかわらず，彼が抽象的思考の意義を認め，哲学に関心を持ったの

は，「実りある人生」の実現というこの実際的目標を常に自覚していたからである。*Of Human Bondage* (1915) には，作者と同様に「実際的精神」の所有者である主人公が，「思いもかけず形而上学的研究に魅せられていく」その過程が描かれている。彼は「Hobbes の逞しい常識を喜び，Spinoza に畏怖を覚え，Hume の懐疑論に共鳴」する。だが，結局 Phillp Carey の得たものは，「その人間を離れた抽象的思想は存在しない」という，いかにも彼らしい結論であった。かくして，自己の人生を「実りあるもの」にするには，自分自身を知らなければならないという古典的テーゼへの回帰が説かれることになる。

Maugham の実際的精神は，もちろん読書においてのみならず，創作においても発揮された。思うに彼は，自分が物語作者であることを強調し過ぎたといってよいだろう。猪口才な批評家たちがそうした発言の尻馬にのって，彼を単なる物語作者として片付けるのは，彼としても片腹痛かったに違いない。だが，*Ten Novels and Their Authors* (1954) で Maugham 自身が認めているように，単なる物語作者など存在しない。すべての作家は作品をとおして人生批評を行なっており，その意味で，みずから意識するか否かは別にして，彼らは「ささやかながらそれぞれモラリスト」なのである。夏目漱石は「文学談」の末尾で，「吾人が世の中にある立脚地やら，徳義問題の解決やら，相互の葛藤の批評やら，凡て是等は小説家の意見を聞いて参考にせねばならん。小説家も其覚悟がなくてはならん」と語っている。漱石と Maugham とは奇妙な取り合わせであるけれども，この場合，両者の相違はむしろ各自の意気込みであって，発言内容にさほどの逕庭があるわけではない。

自己欺瞞を嫌う Maugham のこうした実際的精神は，生涯変わるところがなかった。*The Summing Up* (1938) には，神の有無に関して一切の幻想を排した平明な考察がなされているが，結局彼は自分の理性を納得させうるものを発見できなかったから，あらゆる賢明な人間にならって不可知論を奉ずることになる。晩年の彼が実証哲学者の Alfred Ayer をわざわざ Oxford からフランスの自宅に招いたのも，年来の不可知論にてこ

入れするためだった。もっとも，万一来世や魂の不滅に関して確信が得られたならば，直ちに神と和解するつもりであったに違いない。彼の実際的精神とは，そういった種類のものである。

残念なことに，Maugham は *Ten Novels and Their Authors* の *Tom Jones* 論と *The Vagrant Mood* 所収の "After Reading Burke" を除いて，18世紀の文人に関してまとまった文章を残していない。だが，*Books and You* に推薦されている諸作品のリストを見れば，この時代のイギリス文学のどの面が彼の心にアピールしたのか容易に察せられよう。彼の推奨する Defoe, Swift, Fielding, Sterne, Boswell, Johnson, Gibbon らは，それぞれアプローチの方法こそ異なるものの，いずれも美の追求よりは人生の真実を究めることに力点をおいた作家たちであった。

Maugham が Johnson 博士に心からの尊敬と親愛の情を抱きながらも，同時に Chesterfield 伯爵の書簡集を愛読したのは，対照的な彼ら二人を人生の誠実な観察者として高く評価したからである。Chesterfield に関心を持つというのは，いかにも Maugham らしいといえるが，特に彼のセックス観に心を惹かれたらしい。「性交の快楽ははかないものに過ぎず，その姿勢は滑稽で，その損失はおそるべきものがある」という伯爵の言葉が，*Christmas Holiday* (1939) および *Ten Novels and Their Authors* に引用されている。Maugham によれば，小説家の本来の任務はいうまでもなく創作であり，セックスを含む一切の恋愛行為は，この任務を妨害する煩わしいものに過ぎなかった。したがって，彼にとって Chesterfield の言葉は，この見解を支持するものだったのである。Maugham のこうした指摘が，*Ten Novels and Their Authors* に論じられている10人の小説家全員に当てはまるか否かは，ここでは問わない。だが，少なくとも彼自身の場合，すなわち晩年にいたって「自分は4分の1だけ正常で，4分の3は queer だ」と告白したという彼の場合，Chesterfield のセックス観に共鳴したとしても，不思議はないのである。

Ⅱ. Fielding と Maugham

Maugham の Fielding 観は，もちろん1954年刊行の *Ten Novels and Their Authors* に求めるべきであるが，それ以前にも，彼は幾度か Fielding に言及した。*The Summing Up* によれば，1891年，彼が Heidelberg に留学中，*Tom Jones* を読んでいたところ，ある同国人からむしろ Meredith を読むように勧められたという。このことは，Fielding が当時流行の文学趣味から外れていたことを物語っている。この同国人というのは，いうまでもなく *Of Human Bondage* の Hayward であり，また Ted Morgan の *Maugham: A Biography* (1979) によれば，Maugham の virginity を奪った男ということになる。もっとも，いつの世にも考証派は存在するもので，1989年に出版された Robert Calder の *Willie* は，Maugham が既に King's School 時代に同性愛を体験していたことを指摘している。だが，この場合重要なのは，素直な少年 Maugham が当時の流行に従って Meredith や Hardy を読みはしたものの，結局40年余りのち，*The Summing Up* で次のように結論していることである。「Meredith にせよ Hardy にせよ，*Gulliver's Travels*, *Tristram Shandy*, *Tom Jones* などのように生命のある作品をなにひとつ書かなかったことは，明白だと思う。」

1930年刊行の長編小説 *Cakes and Ale* でも，語り手は Meredith や Pater が昔日の名声を失っていることを指摘し，「昔も今も変わらずに敬意を払っている作品」として，*Tristram Shandy* や *Vanity Fair* などとならんで Fielding の *Amelia* を挙げている。*Tom Jones* ではなく *Amelia* が登場するのは，脱線を非とする Maugham の小説観が原因かもしれない。もっとも，Fielding のこの最後の小説は，*Tom Jones* より脱線が少ないというだけでなく，Maugham の心にアピールするような多くの特質を備えていた。たとえば，作者は bagnio に関する自分の体験を記しながら，「読者よ，どうか諒とせられたい。当時は筆者も若かったのだ」と述べているが，Maugham はこの愉快な弁明に遭遇して，心中秘か

に快哉を叫んだに違いない。

だが，1940年刊行の *Books and You* で推薦されているのは，やはり *Tom Jones* である。そして，1954年の *Ten Novels and Their Authors* にいたるのであるが，10人の小説家を論じたこの書物の成立過程は幾分 Johnson の *The Lives of the Poets* の場合と似通っており，Maugham 自身もそのことを意識していたと思われる。それにまた，彼は Johnson と同様，とりあげる作品に劣らず作者たちの人間性にも興味を持っていたから，同書においても *The Lives of the Poets* と同じ記述方法を用いたのであった。

Maugham は，*Ten Novels and Their Authors* 所収の *Tom Jones* 論の冒頭で，F. H. Duddenの *Henry Fielding : His Life, Works, and Times* (1952) を参考にした旨を断わっている。だが，この小論の土台となったのは，むしろ Sir Walter Scott の *The Lives of the Novelists* であったろう。Maugham にたいして胡散臭さを感じるのは，こういう場合であるが，こうした楽屋裏を暴くのは目下の問題ではない。

むしろ注目に値するのは，Maugham が Fielding に示した異例と称したいほどの共感である。ほかの9人の小説家の場合，Maugham はいかに彼らの作品を激賞しようとも，彼らの人間性については意地の悪い観察姿勢を崩していない。作家に備わる種々の不快な性質は，むしろ彼らの本質だと考える Maugham のことであるから，そうした観察姿勢をとるのは当然といえようが，それだけに人間 Fielding にたいする彼の共感は，読む者の心をうつのである。彼は Fielding の一生を略述したあと，「私は彼の生涯を考えるとき，異常な感動を覚えずにはいられない。彼はいかにも人間らしい人間だった」と語っている。おそらく Johnson にたいする場合を除き，Maugham がほかの作家にたいしてこのような親愛の情を表明するのはきわめて稀ではないだろうか。

もちろん，こうした共感の根底には，Fielding の文学にたいする高い評価が存在した。Maugham の読書目的が著しく実際的であって，人生の真実の追求にあることは既に指摘したが，彼はこの自分の求めるも

のが，Fielding の著作に最大限に実現されているとみなしたのである。Maugham によれば，Fielding は realist であった。realist は人間が善と悪とからなる不完全で弱い存在であることを認識し，そのありのままの姿を公平かつ寛大な態度で描く。そうした現実描写が読者におよぼす悪影響を心配する人びとにたいしては，realist はこう答えるだろう。現実の人生は自分たちの描くよりもはるかに苛烈であると。

これはそのまま Maugham 自身の創作態度と評してさしつかえない。彼は Fielding に託して，いわば自分の文学の弁明を行なったのであった。もちろん，両者の人間観には程度の差異が存在する。善と悪の割合については，彼らの見解は明らかに相違していたし，人間の弱さにたいする寛大さにも，違いが発見されるかもしれない。だが，両者の相違が最も明瞭に現われるのは，悪徳の描写においてであろう。Fielding がその背後に強い批判精神を蔵し，実生活においても悪徳の撲滅に邁進したのにたいして，Maugham の場合，悪徳にたいする批判よりもむしろ関心が，前面に押し出されているのである。彼の叙述態度がしばしば「臨床的」と形容されたのも，このためであった。彼は realist に寄せられる批判の幾つかを列挙し，そのひとつひとつに反論しているが，彼の挙げなかった，そしておそらく気づかなかった realist 批判がひとつ存在する。それは Maugham の行なうような臨床的現実描写が，結局は現実の肯定につながるという印象を読者に与え，耐え難い無力感を彼らに植えつけることである。

だが，Maugham に批判精神が無かったとみなすのは，もとより正しくない。意外にもというべきか，あるいは当然ながらと評すべきか，Maugham があらゆる美徳のなかで最も尊んだのは善である。彼が善の描写よりも偽善の摘発に熱心だったように見えるとすれば，それは現実には善の存在があまりにも少ないからであり，また贋物の善に欺かれることを嫌ったからにほかならない。Karl G. Pfeiffer の *W. Somerset Maugham: A Candid Portrait* (1959) には，娘の突然の死にショックを受けた母親が，一夜にして白髪になってしまう話が紹介されている。Maugham はこの話を聞き，「髪を染めるのを忘れたのだろう」と述べたというが，こ

のシニカルな感想にも，欺かれることへの極度の警戒心がうかがわれる。それだけに，思いがけず真の善良さに遭遇したときは，彼は心からの尊敬を惜しまなかったのである。そして周知のように，この「思いがけない善」，特に「悪のなかの善」を最も見事に表現したのが Fielding であった。彼にたいする Maugham の深い共感はゆえなしとしない。

Maugham が Fielding に共感したもうひとつの原因として，彼らが劇作家と小説家を兼ねた存在であることを挙げてもよいかもしれない。Maugham は，小説と劇作とでは異なる才能が要求されることを繰り返し指摘しているが，このとき彼の念頭にあったのは，おそらく Shaw と Henry James の場合であろう。Shaw が読むに耐えない小説を書いたことはよく知られており，また Henry James の戯曲が無惨な失敗に終わったことは，Maugham 自身が目撃し，その模様を *The Vagrant Mood* 所収の "Some Novelists I Have Known" に報告している。すなわち Mangham と Fielding は，両分野にわたって本格的に活動し，それぞれ成功を納めた稀なケースであり，その意味で彼らは少数のエリートだった。文壇での自分の処遇に常に不満を抱いていたMaugham にとって，この事実は大きな誇りであったはずである。

最後になったが，Maugham が Fielding のなかにイギリス人のひとつのタイプを認め（かりにこれを紳士と呼んでおくが），そのために親愛の情を抱いた事実を指摘しよう。以下に引用するのは，*Ten Novels and Their Authors* の *Tom Jones* 論の一節である。

> 彼の小説を読んでいると，長いあいだ親しくしてきた人にたいするのと同様の愛情を感じる。彼にはどこか現代人らしいところがあるのだ。比較的最近まで，よく見かけたイギリス人のタイプが存在する。ロンドンやニューマーケットでも見かけるし，狩猟のシーズンにはレスタシャー，八月にはカウズ，真冬にはカンヌやモンテ・カルロで見かける。紳士であって，礼儀作法を心得ている。男前で，人がよく，親切で，つき合いやすい。特に教養があるわけではないが，教養のある人びとに寛大である。女性が好きで，共同被告としてしばしば召喚

される。いわゆる働き者ではないし，そんな者になる必要も感じていない。なにもしないけれども，けっして怠け者ではない。十分な収入があって，気前よく金を散じる。戦争が始まれば，軍隊に入り，勇敢に戦って注目される。悪意がまったくないので，皆に好かれる。時が立ち，青春時代は終わる。もはやそれほど裕福ではなくなり，生活は昔ほど楽ではない。狩猟もやめざるをえないが，ゴルフの腕は相変わらずで，クラブのカード・ルームでは，いつでも歓迎される。かつての恋人のひとりの金持の未亡人と結婚し，良き夫として，中年紳士の生活を送る。

Maugham はこう述べて，Fielding はこうしたタイプのイギリス人ではなかったかと推測している。これが Fielding の実像にどの程度まで迫っているかは別にして，Maugham の読者であれば，彼がこの型の人物を常に好意的に描いてきたことに直ちに気づくであろう。たとえば，*Lady Frederick* に登場する Paradine Fouldes は，まさしくこうした人間のひとりなのだ。奔放な青春時代を送った彼も，今は妹の家庭を優しく皮肉な目で見守る中年独身男で，作品の最後で，昔の恋人の Lady Frederick と結ばれることが暗示されている。*Up at the Villa* (1941) の Rowley Flint も，やはりこの範疇に分類してよいだろう。どうしようもない放蕩者で，働く必要を認めず，「本当に職を求めている人間の邪魔をしたくない」という。だが，女性には魅力のある男で，ヒロインの危急を救う。

しかしながら，いかに Maugham がこの型の人物に親愛の情を抱き，好意をもって作品に描いてきたにせよ，彼自身はこのタイプからはかけ離れた存在だった。単に性格的に異なっていただけでなく，階級の壁によって彼らから隔てられていたのである。この壁の越え難いことを Maugham が痛切に意識していたことは，*The Mixture as Before* (1940) 所収の "The Lion's Skin" からも察せられよう。これは紳士になるという不可能事に挑戦し，死をもってその望みを達成する男の物語である。

だが，この不可能事に挑むことの無益と愚かさを承知しながらも，実は Maugham 自身もまたこれに挑戦した一人であった。Pfeiffer は，Maug-

ham が常に紳士たることを目指し，また人間を評価するにあたって，紳士であるか否かを物差しのひとつにしたと語っている。その意味で，"The Lion's Skin" の哀れな主人公 Forestier 大尉が紳士にたいして抱く憧憬の念は，少なくともその一部分は作者自身のものだったと評してよいだろう。そして，Forestier 大尉の場合に劣らず，Maugham のこうした紳士意識は彼自身にも悲劇的な結末をもたらすのである。

Maugham は常々自分が正当な評価を受けていないと感じていたが，彼をそのような地位に止まらせた一因は，その階級意識にあったといえないだろうか。元来紳士とは，あらゆる面において極端に偏することを嫌うものである。保守党を率いて三度首相をつとめた政治家で，*Iliad* を blank verse で翻訳するなど，多才をもって知られた14世 Derby 伯爵は，「何事でも相当のところまでやるが，やり過ぎることはない」と自分について語っている。Maugham もまた紳士を自認する以上，たとえば Flaubert のように真剣に文学に没入することに，一種の野暮ったさを感じざるをえなかった。これは *The Summing Up* でみずから告白するところである。一般の作家たちより交際範囲の広かった彼は，文学などまったく意味を持たない世界の存在することを知っていた。その結果，彼の優れた平衡感覚が働き，完全性を目指して偏執狂的努力をする彼に水を差したのである。Maugham は *Cakes and Ale* で，「作家と紳士を兼ねるのは難しい」と指摘しているが，彼はこの自分の言葉を思い出すべきだった。

Ⅲ. Gibbon と Maugham

Maugham の Fielding 論は有名であって，Fielding 研究者からも注目されているが，Maugham と Gibbon の関係を論じたものは少ないように思う。それも当然であって，Gibbon に関する彼のまとまった発言といえば，*Memoirs of My Life* (1796) を推薦した *Books and You* (1940) の短い文章がほとんど唯一のものだからである。

だが，この推薦文を読むとき，読者は奇妙な事実に気づくであろう。元来 Maughamは *The Decline and Fall of the Roman Empire* の読者

ではなかった。彼は *The Vagrant Mood* (1952) 所収のエセー "The Decline and Fall of the Detective Story" のなかで，この Gibbon の代表作をところどころ拾い読みしたに過ぎないと告白しているが，おそらくその後も完全には読み通すことがなかったと推測される。その彼がどうして Gibbon の *Memoirs of My Life* を *Books and You* で推薦したのだろうか。彼は同書の冒頭で，「昔から一致して最高傑作だと認められている文学作品についてのみ語りたい」と，その執筆目的を記している。こうした場合の彼の律義な性格を思えば，当然この方針を固守するものと期待してよいだろう。だが，実際には彼は，「Gibbon の自叙伝は私の愛読書ではあるけれども，かりにこれを読まなかったとしても，自分にとって大きな損失になったとは言い切れない」と述べて，*Memoirs of My Life* が「最高傑作」ではないことをみずから告白しているのである。

結局，この *Memoirs of My Life* の推薦については，個人的動機が働いたと推測するより仕方がないが，それは一体何だったのだろうか。Maugham が Mérimée と同じく，自伝，回想録，日記などの愛読者だったことは，今さら指摘するまでもない。だが，この種の文学からひとつ作品を選ぶとしても，なぜ Gibbon でなければならないのか。*Books and You* にとりあげられているイギリス文学は，事実上18世紀と19世紀の散文作品であるが，この時代は Hervey の回想録や Greville の日記を生んでおり，これらが推薦されたとしてもけっして不自然ではない。両者とも Maugham の愛読した書物なのである。

Maugham は Gibbon の *Memoirs of My Life* を推薦する理由として，同書から「私は恋人として嘆息し，息子として従った。私の痛手は，歳月と相見ぬことと新生活の習慣とによって，いつしか癒されていった」という個所を引用し，この愉快な文章を読むだけでも，*Memoirs of My Life* は存在価値があると述べている。これは Gibbon が父の反対によって恋を諦めたときの感懐を記した名高い文章で，Bartlett の *Familiar Quotations* にも登場する。もっとも，1966年刊行の *Memoirs of My Life* の決定版では，この名文句は別の言葉で置き換えられているが，

Maugham が利用したのはもちろん Sheffield 編の旧版であるから，ここでは問題にしない。

確かに前述の引用文は，いかにも Maugham 好みの内容である。以下に紹介する *A Writer's Notebook* (1949) の一節は，すこぶる即物的な Maugham の恋愛観を伝えているが，先の Gibbon の言葉は，この恋愛観を例証するものといえよう。「恋愛が主として種の繁殖のための本能だということは，大概の男が手近なところのどんな女とでも恋に陥り，その女が手に入らなければ，直ちに次の女で間に合わせるという事実に現われている。」すなわち Maugham にとって，ただ一人の相手に生涯純愛を捧げるというのは，偽善的虚妄か性欲の不足を意味しており，また失恋を回復不可能な傷手と考えるのも，同様に虚妄にほかならなかった。したがって，Gibbon の言葉にぶつかって，彼が会心の笑みを浮かべたであろうことは想像に難くない。

先に述べたように，Maugham は常に人生設計を意識した人間であるから，その面からも Gibbon の生涯に関心を持ったとも考えられよう。たとえば短篇集 *Cosmopolitans* (1936) 所収の "Mayhew" は，裕福なアメリカ人弁護士が，35歳で突然仕事をやめ，カプリ島に居を移し，ローマ史の資料収集に14年間専念したあと，いよいよ執筆にとりかかる段階になって，急死するという物語である。作者はこの短篇の最後を次の言葉で結んでいる。「彼の生涯は成功だった・・・彼は自分のしたいことをして生き，ゴールを目のまえにして死んだ。目的が成し遂げられたときの悲痛な思いを知らずにすんだのである。」

これで分かるように，Maugham は目的を達成したあとのその人間の生涯，言い換えれば成功の意味に関心があったのだ。あるいはむしろ，その後の人生にどのような意味があるのか，不安を感じていたというのがより正確かもしれない。したがって，代表作を発表してから数十年も生きなければならなかった劇作家の Congreve や Sheridan にたいするのと同様，Gibbon の生き方にも興味を持ったとしても当然である。Gibbon 自身は Maugham の疑問に答えて，*The Decline and Fall of the Roman*

Empire を完成したときの気持を，*Memoirs of My Life* に次のように記している。「私は自由を回復したし，おそらく自分の名声を確立しえた。こう考えて，最初は喜びを感じたのは確かである。だが，気の合った多年の仲間と永遠に別れを告げたことを思い，また私の『歴史』が将来どのようになるにせよ，歴史家の生命は短く儚いことを考えると，高慢の鼻はたちまちへし折られ，醒めた，憂愁の念が私の心に広まった。」

しかしながら，Maugham が *Books and you* で *Memoirs of My Life* をとりあげた最大の理由は，結局のところ Gibbon を congenial な存在とみなしたからにほかならない。これは同書を通読すれば直ちに理解できることなので，Maugham の伝記作者たちがこの点に注意を払っていないのがまことに残念である。

Memoirs of My Life に描かれている Gibbon は，Maugham にとって Fielding よりもはるかに身近な人物であった。Maugham と Gibbon は，その見解と生き方において多くの共通点を有している。彼らはともに大衆に信をおかず，宗教的熱狂を嫌悪し，迷信よりも無神論のほうが弊害が少ないという Plutarch と Pierre Bayle のテーゼを奉じていた。

二人とも内気で，人まえでしゃべることを嫌った。Gibbon は「生来の内気が誇りのためにかえって強化され，ペンの成功が自分の声を試してみる勇気を奪った」と告白しているが，吃音者だった Maugham は，弁舌の才能は知性の有無とはかかわりがないと指摘し，弁舌によって大事が左右される民主主義制度に疑問を表明した。二人はまた Swift と Addison の文体について同様の感想を持った。もっともこれは，Maugham が Gibbon から無断借用におよんだのかもしれない。Gibbon は「自分はお茶と夕食のあいだに無邪気なカード遊びに興ずることを，けっして軽蔑するものではない」と述べ，Maugham もまた「カードを知らない人間を気の毒に思わずにはいられない・・・カードこそは老年の良き友である」と記した。

Gibbon と Maugham は，自分の生きたイギリス社会でそれぞれ大きな成功を納めながら，その社会の価値観と完全には相容れぬものを感じていた。二人を結びつける最大の絆は，祖国にたいする ambivalent な気持

と，むしろ外国にこそ知己が存在するという意識である。

Maugham はパリに生まれ，フランスを終の住処とした。「私はフランスを愛してきた。多くの友人をフランスに持っている。フランス人からは親切以外の仕打ちを受けたことがない。彼らは私を尊敬してくれた。私が現在ような人間になったのは，主としてフランス美術，フランス文学，フランス文化のおかげである」と *Strictly Personal* (1941) に記している。

Gibbon は16歳から21歳という多感な時期を Lausanne で過ごし，その結果，「イギリス人であることをやめてしまった。」後年彼は，「自分はイギリス人としての知識を持ちながらも，彼らの偏見には煩わされずに我が国民を観察した」と語っている。彼はアルプス以北の諸国民のなかで，イギリス人のフランス語が最も拙劣だと記しているが，もちろん彼自身も Maugham もこの言語に堪能であった。Gibbon は最初の著作 *Essai sur l'étude de la littérature* をフランス語で著わしたが，それは「英語で書くより楽だった」からであり，当然ながらというべきか，この作品は「国内よりも国外で好評を博した。」そして，1783年，やはり Maugham と同様，国外に終の住処を求めてイギリスを去っている。彼が居を定めたのは曾遊の地 Lausanne であるが，それは訪問というよりむしろ帰郷であった。

先に記したように，Maugham は作品にたいしていかに敬意を払おうとも，作者たちには安易に共感を示すことがない。それだけに，Fielding と Gibbon にたいする彼の態度は，読者の興味をそそってやまないのである。以上は，その原因と思われる事実を並べたに過ぎない。